



吉田敬史\*

# “ 持続可能な社会 ”へのチャレンジ

Challenges toward a Sustainable Society

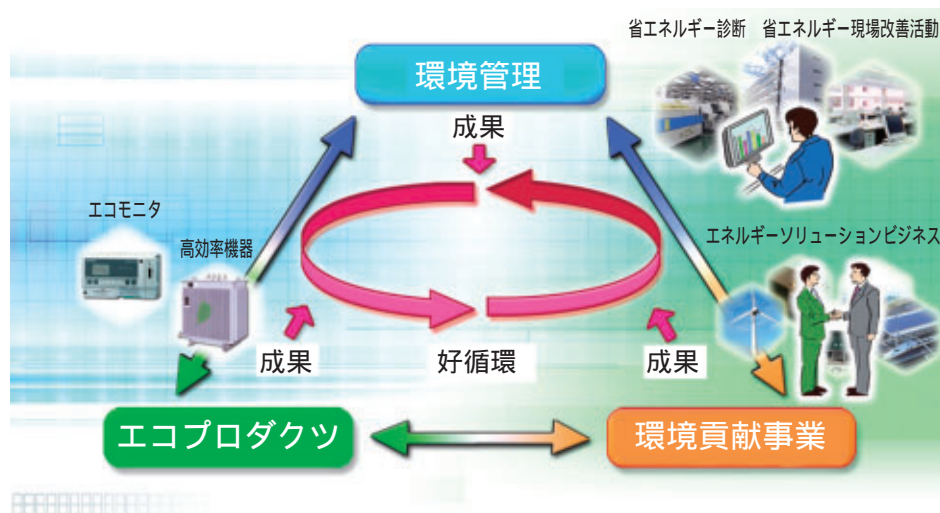
Takashi Yoshida

## 要 旨

“ 環境経営 ”という言葉が社会的な認知を得てきている。この言葉には、環境・資源制約をネガティブにとらえるのではなく、それに積極的に対応する経営が企業価値と競争力を高めるという概念が込められている。技術に立脚するメーカーである三菱電機の環境経営は、製品の製造プロセスで環境保全に配慮するだけでなく、事業や製品そのものを通じて環境保全に寄与する必要がある。企業活動の中で社会の環境保全ルールを順守する“ 環境管理 ”は、社会的責任を果たすための“ 守り ”の活動として最重要である。ここで守りを受身でとらえるのではなく、自社の持てる技術と製品を最大限活用して優れた守り( 環境管理 )を実現し、その知識や経験・技術を顧客に提供することで事業を拡大す

るという“ 攻め ”の視点を持つことが肝要である。一流の守りは一流の攻めに転化する。環境保全の守りと攻めのシナジーを形成し好循環を生み出していくことが当社グループの環境経営の基本戦略である。こうした考え方の具体化の一環として、京都議定書で定められたCO<sub>2</sub>排出削減目標の達成を目指した社内の省エネルギー活動に自社の省エネルギー関連製品や技術を計画的に適用し、その適用経験を省エネルギー事業に活用する取り組みを製造部門と営業部門が連携して進めている。

本稿では、こうした認識に立脚した当社グループの環境経営の全体像と代表的な成果について述べる。



## 環境経営 “ 守り ”と“ 攻め ”の好循環の形成

“ 環境管理 ”は、環境経営の中で“ 守り ”の根幹である。メーカーとしては環境に配慮した製品“ エコプロダクツ ”や環境貢献事業を通じて社会に貢献することが求められている。これらの活動全体が環境経営であり、その中では“ 守り( 環境管理 )”と“ 攻め( エコプロダクツと環境貢献事業 )”が相互に連携して好循環を生み出すという視点が重要である。社内の省エネルギー活動と省エネルギー事業の連携は好循環形成の一例である。